

小学校四年生の時に交通事故で足をケガし、松葉杖をそれからずっと使っている恵美ちゃんと、病気がちな由香ちゃんを中心にしたお話。それぞれのお話には主人公「きみ」がでてきて、短編十篇の中でそれぞれ違う「きみ」のお話を聞かせてもらえる。恵美ちゃんと由香ちゃん、二人とも苦しい学校生活を体験してたこともある。でも二人でいたから、クラスの子が何言っても気にせずいた。

「きみ」の目から見た友達関係のことが、リアルに、現実的に描いてある。いや、これが現実なの。日本の女子って本当にこういうの。いじめってこんなに身近なものなの。と私は思った。お話はそれぞれ違って、気持ちも色々で、面白いが、怖かった。驚いた。クラスの中の人間関係ってこんな複雑なんだろうか。自分のクラスに比べると、全く違った。

私を通してきたニュージージーランドの小中学校でもやはり人気者はいた。そういう子は確かにルックスも良いし、勉強やスポーツも得意な子が多い気がする。でも別にいばったり、「グループ」を作って他の子を無視したりはしてなかった。私は「普通」の子。特に目立つこともないし、すごく人気があるほうでもない。でも、学校は好きだし、人気者の子や、その他のクラスメイトとも仲良し。「自分は自分、人は人」ニュージージーランドでは当たり前のこととして育つ。もし、「変わってる」って他の子に思われていたとしても、私は別に無視されたりいじめられたりされたことはないし、逆にしたことない。しようと考えたこともないかな。誰が誰と付き合っても関係ないし、誰かのグループに入っていないと落ち着かない、なんてこともなかったし、自分が「これ」をやりたい、って思ったときに「それ」を一緒にやる人がいればやるけど、いなければ別に一人だけって気にしない。ここではそれが「普通」だから。もし日本にいる子たちの多くが、毎日行く学校で、たくさんさんの時間を過ごす場所でも、いつもそんな風を感じているんだとしたら、どんなに大変なんだろう。怖い、とまた思った。ドキドキ、ビクビクした。私自身はいじめを経験したことはない。ニュージージーランドの子も全くないっていう訳ではないけど、日本ほどひどくひんぱんじゃないと思う。

『みんな』が『みんな』でいるうちは友だちじゃない「これは、恵美ちゃんの言葉だ。人気者だった恵美ちゃんだけど、事故のあと、そのことに気づいた。その日は途中から雨が降ってきて、傘を持っているのは自分しかいなかった。さして歩いていたら、仲良しの子たちがたくさん入ってきた。小さい傘はすぐにいっぱい、知らない子どもどんどん押してくる。何でこの子まで入ってくるんだろう、入って欲しくないのにな、でも、言葉では言えない。「もう」と思って自分の傘から飛び出していった。その矢先に事故にあったのだ。そして、「みんな」のことを氣遣った自分を責めた。言いたければ言えばよかったのに。そして気づいた。そんなの「友だち」じゃないじゃん。それ以来由香ちゃんとか付き合わなくなった恵美ちゃん。誰に対してもぶっきらぼうにしかしゃべらない恵美ちゃん。事故の前とはまったく違う恵美ちゃんになってしまったのだ。だけど、それからの恵美ちゃんは私には「普通」に見える。私がいる場所ではそれで良いんだよ。日本のみんなもそう思えればいいのにな。自分は自分。みんな違ってみんないい。あなたはあなた。それぞれを尊重しよう。自然とそういうことを教えてくれるニュージージーランドの教育っていいな。恵美ちゃんも事故という辛い経験を通してそれに気づいたみたい。そして本に出てくるたきさんの「きみ」にもそのことに気づけるヒントをたくさんあげたんだね。

「いなくなっても一生忘れない友だちが、一人、いればいい」も恵美ちゃんが言っていた。私にもそういう友達がいる。一生の思い出がいっぱい頭に入ってる。一人、二人そういう人たちの人生にいてだけで、楽しければそれでいい。そう思い始めた。恵美ちゃんの言葉も私を気づかせてくれた。友達が多くても少なくてもみんなを大事にしたいという気持ちももっと増えた。友達は数ではなく、友情きずなが大切だと思う。

普段日本語の本を読まない私が面白いと思った本、お勧めです。